Wait for you ~ **新しい道へ** ~

美波可奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Wait for you〜新しい道へ〜

【Nコード】

N7386H

【作者名】

美波可奈

【あらすじ】

新しい仲間を迎え進んでいく女の子の話

古川夕美子 1

それから聖子にとって多分地獄の日々が始まった。

鞠子は聖子がショックを受けるだろうけどとあらかじめもうドラムは叩けないと伝えてくれていた。

聖子はしばらく塞ぎ込んだけどある日。

「真理が無事だったからそれでいいやと言った。」と聞いて。私はまた泣けた。

人のせいにして生きるのはぬるま湯に浸かったみたいで楽だろうけど。

そうじゃなかった聖子に深く感謝をしたんだ。

そして現実問題。

私たちはドラムが叩けるバンドとして活動してたから。

ドラムが叩けなくなった今。

誰かを入れないといけないことになったんだ。

大きく方向転換するのは楽だけど。

それは聖子が許さなかった。

私の所為でスタンスを崩すのは本望じゃない。

そんな昔の武士みたいな言い方で。

それで私が思いついたのは従姉妹の夕美子のことだった。

夕美子は母方の従姉妹で。

フルネームは古川夕美子。

私と一緒にさびしい瞳をした私によく似た顔立ちの子だった。

夕美子の母親は私の叔母にあたり。

そんな叔母の顔を私は全く覚えてない。

それはうちの母親の田原結理のお姉さんにあたり。

私が生まれてしばらくして夕美子を産んだとき。

産後の予後が悪くて亡くなったらしい。

だから夕美子は母親の顔を知らない。

結花姉みたいに結花姉より年の離れたお姉さんが夕美子にはいるんだけど。

数年前叔父と夕美子を置いて家を出て行った以来絶縁状態だと聞く。

愛する人を失った痛みは人それぞれで。

だけどそれが原因で夕美子のお姉さんは出て行ったと聞く。

そんな夕美子は私と一つ違いで。

今受験の年だった。

以前から私のこと羨ましいと夕美子は言っていたから。

それならもしよければと誘ってみようと思うんだ。

夕美子さえ良くて一矢たちさえ支えてくれるならば。

投資も良いかもしれないと思うんだ。

古川夕美子 2

「一矢。」

あの告白を受けてから。

私は一矢とちゃんと話してなかった。

意識的に避けてたわけじゃないけど。

私には正直判らなかつた。

一矢のこと好きだけどずっと一緒に歩いていきたいと思ってるのかどうか。

自分のことなのにさっぱりわからなかつた。

一矢は何も言わなかつた。

それについて何も触れなかつた。

私が打診した条件に一矢は眉根を寄せて。

「でもその夕美子ちゃんとやらが失敗しないという保証もないんじゃないか。」

そう言つたから。

「真理。誰でも引つ張つてきたらいいってわけじゃないんだぞ？」

そう当然の事を言うから。

私はね。

「それは判つてる。良く判つてるよ。」

そう呟いたんだ。

「夕美子がいって話。

まだ本人にもしてないから。

だけどね。いつも思うんだ。私は周りに恵まれて。

疫病神のくせに周りの人が愛してくれて。
何とか立ってるんだなって。」

「疫病神って。」

一矢は案の定苦笑したけど。
でも私は本気だった。

「こんな疫病神だって成功したんだよ？」

夕美子にだってチャンスがあるって思うんだ。」

夕美子がかわいそうだとかそんなふうに思ったから思いついたわけ
じゃなかった。

夕美子を思いついた理由は。

至極勝手かもしれないけど。

昔一緒にうちの道場に通ってたことがあって。

その時に肩の力と腕の力が成人男性以上を誇っていたから。

たかが中学生だよ？

だからドラムに向いてるんじゃないかって。

私がそう呟くと一矢は。

「本当はもう出来上がった奴を募集した方がいいんだけど。」
そう言ったから。

「でもそれじゃあ私たち色にきつと染まってくれないよ？」
私はそう言ったんだ。

染まってる奴が丁度いい。

これはみんな思ってること。

例えばDESTEINYのドラムを持ってきたとしても。

そこだけDESTINYになっってしまうから。

「じゃあ。とりあえず会うだけ会ってみるから連絡は真理が取って

」

一矢がそう言ってくれたから。

私は嬉しくて。

冗談めかして後ろから抱きついた。

「！？真理？」

「ありがとう。一矢。

大好きだよ。」

きつとそんな感情でいいのかもしれない。

井上光子 1

「真理。あんまり人の事煽るんじゃない。」
振り向いてベシツと叩かれた。

「だって一矢。」

私がそう言つと。

「俺本気だからな？」

わかつてんの？」

結構真剣な眼差しを向けてきたからヤバいと思った。

「…ごめん。判つてない。」

「全く。」

一矢はため息をついて。

「この間も言つたけど俺真理の事本気で好きだから。」

あんまり煽るな。」

釘を刺されて。

一矢の忍耐に私は。

私は本当にありがたいつて思った。

「真理のお父さんに誓つたんだから。」

試すようなまねはするな。

わかつたか？」

すぐに私は。

「はい。」

そう返したんだ。

きつと恋かどうかわからないけど。

一矢にはまつすぐに私を見てほしい。
そう思った。

「それである件はどうするんだ？」

一矢は抜かりがない。

「…あの件は保留つてわけにもいかないか。」

「真理はやりたいの？ やりたくないの？」

端的に言えばそう言うことで。

私がいやりたいかやりたくないか。

どっちかだった。

その話はこの新しいドラムスの話と並行して沸いた話で。

リハビリ中の聖子とその看病の鞠子は実際問題。

ライブもレコーディングも無理だから基本的にオフに入る。

取り残された私に聖子と鞠子の提案はこうだった。

「真理がソロでやるって言うのはどう？」

もちろんオフでもいいんだけどオフになり過ぎの感が拭えないんだ
けどと鞠子は言った。

実際私の問題で2回ほどライブ途中で延期になり。

今回も聖子が撃たれたから急遽オフになった。

「泉野真理ソロライブって結構目につくかも？」

でもね。

私正直ソロは自信がない。

躊躇するし。

しかもちゃんとそれなりの心得があるのならばいいけど。

歌は好き勝手に歌ってるから。

歌手だけど歌の心得は何も知らないから。

だから私は妥協案を思いついたんだ。

「忍のここに入れてもらうってのはどう？」

私が提案した言葉に一矢は。

「また厄介なことを〜」（泣）
「
そう言った。

井上光子 2

「その件は俺が打診してみるから。」

頼むから真理。勝手な行動はしないでくれ〜〜（泣）」

しばし嘆いてから一矢は。

思い出したように呟いた。

「そっぴゃ今回の聖子ちゃんが撃たれたのを教えに来てくれたの井上光子だったぞ？」

何かライブチケットあげたのか？

そう呟く一矢を横目に。

何だか心が温かくなって。

「えっ？本当に？」

私は光子を信じてなかったわけじゃないけど。

まさか本当に来てくれるなんて思ってなかったから。

「真理のその顔見たらきつとあいつも喜ぶんじゃない？」

そう言ってしまったという表情で一矢は私を見て。

「ってか。ダメだからな。」

真理。会いに行くのはダメだからな？」

「ねえ。一矢？」

柄にもなく媚を売ってみる。

「ダメだったらだめだ。」

「一矢。お願い。」

今回だけは見逃して？

ちゃんと仕事するしちゃんと一高卒業するから。
お願い。」

一矢はため息をついて。

「…親父と兄貴に怒られんのいつも俺じゃないか。」
ぶつぶつ呟いて。

私の携帯にメールを送ってくれた。

それは井上光子の連絡先だった。

そして私は打ち合わせを終えて。

部屋に戻り井上光子に連絡をとったんだ。

親愛なる井上光子様。

先日はライブに来てくれたって聞いて。

お礼が遅くなってしまっただ。

私本当に光子に来てほしくて。

見てほしくて。

でも散々なときに来てもらって本当にごめんね。

メンバーの真田一矢から聞きました。

一矢に私たちの事件を告げに言ってくれたの光子だったんだってね？
それもお礼すら言えなくてごめんね？

あれから家を出て南へ行っただって聞いて。

きくと会えたのはあのライブの時間が最後だったんだね。

私仕事が忙しくてなかなか学校にも行けなくて。
気づいたらみんな卒業しちゃって。

私だけ取り残されちゃって。
焦ってた矢先の出来事でした。

私の身代わりみたいに撃たれた木村聖子は一命を取り留め。
以前みたいにドラムはできないけど歌は出来るって。

私はきつと疫病神みたいに人に巢食い。
周りの人間を不幸に巻き込むみたいだよ。

だけどね。

かおるも言ってたけど。

私諦めないんだ。

幸せになるまであきらめないんだ。

だから光子にもお礼がてら会いに行くからそこんところよろしく。

新しいドラムスと新しいソロ活動が始まる前に会いに行くから連絡
頂戴ね。

泉野真理

この文面を読み返して私はちょっと笑えたんだ。
結構私らしいからきつと光子は眉根を寄せて嫌そうな表情で返事を
送ってくるだろうと。

なんだかそれがとても待ち遠しかったんだ。

本間大祐

南へ会いに行く。

私は胸をときめかせていた。

まるで恋人に会うように嬉しかった。

それはきつと私は。

井上光子の姉かおるを本当に好きで。

好きで大好きで。

その妹の光子が悪い奴のはずがないと思ってるし思ってたから。

「ねえ？何だつてそんなに泉野は私を信じるわけ？」

光子に会った途端言われた言葉がそれだった。

「私。ろくでもないことしかしてないと思うんだけど？」

光子は眉根を寄せて嫌そうな表情をした。

「だけどね。光子。」

私かおるが言ってたこと本当だと思ってるから。」

かおるはいつも光子は自分よりずっとやさしいと言ってたから。

「…かおるか。」

また嫌そうな表情をするから。

「そんな顔しないで。」

かおるはきつとあなたの心見てたんだよ。」

だから怖いんだ。

光子が呟く。

「真意を見抜かれてるのって怖いんだ。」

「だけど本当は後悔ばっかでしょ？」

「悪いことしようとする後悔しか残らないでしょ？」
私が問うと光子は頷いて。

そして。

手招きをしたから。

何なの？と思って振り向いたら。

男の子が立ってた。

「光子さん。悪い。遅れた。」

私は意味が判らずまた視線を光子に戻すと。

「コレ。一応今付き合ってる男だよ。」

テレながら紹介を受けた。

「えっ？」

「あんたみたいに真田さんほどカッコいい人じゃないけど。」

私には大祐が一番。」

「本間大祐です。」

私は妙に納得して。

安心して。

「ってか北からは遠いって。」

光子さんいつも強引だから〜。

そう言いながら大祐は光子を嬉しそうに見つめた。

「あなたが泉野真理さんか。」

俺あなたの歌は良く知ってるけど動いてる映像は見たこと無くて。

俺と光子さん結び付けてくれたのはあなたの歌だったんだよ？」
光子が真っ赤な顔をして否定をする。

「ってかそんなことはないし。」

「また素直じゃないんだから。」

光子さんはくくく。

「光子。良かったね？」

片桐さんじゃなくても良かったね？

私が口だけそう動かすと。

光子は頷いた。

「泉野には色々借りがあつたし。

返さなきゃって思ってたし。

それに私は大丈夫だって伝えたかったから。」

光子はそう静かに言った。

「じゃあ。私帰るね？」

またメールするよ。」

私は何だか帰りもウキウキしながら電車に乗ったんだ。

光子はやつと理解者を見つけたんだ。

そう思うと。

何だか気持が温かくなって。

さつき光子が席を外したとき聞いてみた。

光子は真面目だけど同棲とかしてるのか？とか。

そしたら大祐が言うんだ。

「それなら苦労しない」って。

「付き合い始めて日も浅いけど自分のところに泊まったことも光子の部屋に上がったこともない」って。

光子は一回だけ抱き寄せたら本気で抵抗したって。

まるで愛されることを恐れるように。

「それで付き合いやめるとか思ったこと無いの？」

私がそう問いかけたら。

大祐は言っただ。

「それなら初めから付き合いしない」って。

ああ。それで。

だからか。

何だかわかった気がしたんだ。

光子がたまに見せる安堵の表情。

だからか。

私は妙にうれしかったんだ。

帰ったら一矢に報告しよう。

私は一矢じゃないとだめなんだって。

晁一じゃなくて一矢なんだって。

私は古風で。

でもそれを判ってくれた人に会えたんだって。

光子もそうなんだって思えたら何だか本当にうれしかったんだ。

Wait for you 1

翌日。私は夕美子を呼び出した。

夕美子は飾らない服で私の楽屋兼部屋に来た。

夕美子を一目見た一矢は。

思わず。

多分思わず。

「真理かと思つた。」

そう言つたから。

きっと私と夕美子は容姿が似てるんだろう。

「マコトさん。このたびは声をかけてもらつて本当に感謝してます。」

夕美子はしつかり私の本名を呼ぶ。

一矢に夕美子を託すと一矢はにっこり笑つて。

「ビシビシ行くけど覚悟しろよ?」

そう言つた。

そして私を見て。

「真理つて書いてマコトつて読むんだつたんだな。」

「真理だとずっと思つてた。」

そう言うから。

「うちは親が男の子が欲しくて女でもいける名前考えたつて言つてた。」

「んじゃ。マコトさん。」

DESTINYの件はOK出たからそつちはそつちで頑張るよう

に。」

一矢は一矢なりの優しさで。

私の願いを着実に現実のものへと引き寄せる。
これから。

私のこれからと夕美子のこれからはとても厳しいものとなる。

そしてDESTINYでは私が入る話は無くて。

あくまで泉野真理withDESTINYという期間限定のプロジ
エクトとなった。

ボーカルの忍とは上手くかみ合ったので。

本当に忍には感謝した。

そして期間限定の間にまた新しい仕事が舞い込んだ。

それは私をモデルに私の生きてきた道を忠実に再現するというドラ
マの話だった。

私は興味がないと話を聞かず話を持ってきたディレクターを追いや
つたら。

後で一矢に叱られた。

っていうか言い諭されたんだ。

一矢は一矢なりに稼ぐ方法を考えていて。

聖子も鞠子も実際経済的に厳しかったから。
真理に稼いでもらわないと困るんだと言われ。

私は渋々承知したんだ。

Wait for you 2

そしてそのドラマの話はどんどん具体化していった。
私へいろいろと脚本家が聞きに来て。

どんどん原稿の下書きが出来ていく。

「でも私みたいに立ち直るのもきつと難しくないですよ？」
私が言うと脚本家は微笑んで。

「未来の自分っていうのも良いですね？」

それなら誰でも救われそうだもん。」

「でしょ？でも本当なんですよ？」

先輩は過去を見たって言ってましたけどね？」

だってね。

私は皆に支えられて生きてるって気づいたんです。

誰も悲しまないって傲慢にもほどがあるって気がついたんです。

私の初恋だった的場晃一は私を守って逝ってしまった。

私の親友だと呼べる井上かおるは光子を守って逝ってしまった。

美石先輩はへこみながら頑張ってる。

佐伯だって怖い目に遭ったのに私を許してくれた。

大好きだった両親は心中してしまっただけ。

でも私の周りには疫病神の私を許してくれる人が沢山集まってくれた。
た。

木村聖子も木村鞠子も。

私は本当に周りに助けられてるんだって実感するんだ。

私の思いはそれだけだった。

生きてるのも悪くないって。死ななくていいんだって。

そして春になり。

ドラマが始まった。

オープニングは泉野真理 with DESTINY のイキルチカラ。

エンディングと挿入歌は Wait for you with 古川

夕美子となった。

私の道はまだまだこれから。

ずっとずっと続いて行くんだ。

終。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7386h/>

Wait for you ~ 新しい道へ ~

2010年11月16日04時25分発行